

八木宏樹名誉教授記念号の刊行にあたって

学長 和田 健 夫

八木宏樹先生は、1976年に東京水産大学（現東京海洋大学）をご卒業後、1976年から1978年まで同大学大学院水産学研究科（水産増殖学専攻）、1979年から1980年までフランス国立海洋研究所ブルターニュ海洋学センターにフランス政府給費留学生として派遣され、その後、1980年から1983年9月までフランス国立エクス・マルセイユ大学Ⅱ大学理学部大学院で研究に従事、学位取得後は研究員としてマルセイユ海洋学センター無脊椎動物生態生理研究室に勤務されました。エクス・マルセイユ大学から理学博士（1983年）、東北大学から農学博士（1990年）の学位を取得されました。1986年4月から1997年3月まで道立北海道原子力環境センターの水産研究科長（1991年3月から1997年3月まで道立中央水産試験場海洋部主任研究員兼海洋科長兼任）を務められた後、1997年4月に本学商学部（一般教育系）教授として赴任、2014年3月に定年退職されました。定年後2年間の特任教授の期間を含め、21年の長きにわたり、本学の教育研究に多大の貢献をされました。その間、一般教育系学科主任（1999年4月～2000年3月、2013年4月～2014年3月）、教育研究評議会委員（2014年4月～2016年3月）を務めるなど、大学運営の面でもご尽力を頂きました。

八木先生の専攻は、生物学（海洋生物学、生物海洋学、環境生物学）です。「海洋環境要因の変動が及ぼす海産生物への生理生態学的な影響」の研究分野において数多くの研究業績を残されています。たとえば、論文には、「北海道における栽培漁業に関する基礎研究」水産海洋研究59(1)、1995年、「漁業と海洋レジャー産業の調和をめざした海面利用計画について－漁港解放と漁業資源－」海と港vol.20、2002年、「海草類の群落構成と植食動物の生息量

からみた磯焼け発生機構の解明」農林水産技術会議事務局編『磯焼け発生機構の解明予測技術の開発（水産庁特別研究成果シリーズ317）』1997年（6-15頁担当）、「北海道積丹半島西岸における大型海藻と無節サンゴモ群落の分布面積の年変動」（赤池章一他と共著）北水試研報56, 1999年, 「忍路湾における沿岸水温と栄養塩の関係」（中多章文他と共著）同59, 2001年などがあります。他方で、フィールドワークに取り組み、在任中、数多くの外部資金による調査、共同研究・受託研究等を成し遂げ、本学に多大の貢献をされました。それらは、たとえば、ホクサイテック財団助成金「環境に配慮した河川景観構築と市民生活への影響基礎調査」2000年、ノーステック財団助成金「漁業と海洋レジャー産業の調和をめざした海面利用計画の構築」2001年、共同研究「青函トンネル内浸透水及び空間の有効利用に関する研究」2000年～2001年、共同研究「生ウニの鮮度管理と品質保持技術向上に関する研究」2016年、そして2015年から2017年まで続いた積丹町からの受託研究（河川環境改善、漁業系廃棄物資源活用推進事業、冬季観光体験等）があります。さらに、本学のビジネス創造センター（現グローバル戦略推進センター産学官連携本部）が推進した韓国全北大学との共同研究（2011～2012年）にも参画され、生物学研究の成果で貢献されました。

教育の面では、先生は、「生物学Ⅰ、Ⅱ」、「食糧生産と環境」、「環境科学」、「自然・健康科学特講（大学院現代商学専攻）」、「基礎ゼミナール」など一般教育系の講義・ゼミナールを担当されるほか、専門科目である「研究指導」を何度も担当されました。研究指導のテーマは、生物資源を巡る諸問題、環境保全から始まって食料生産さらには商学部のゼミらしく地域振興などに広がりました。先生のゼミは、学生に課題を見つけさせ、調査やフィールドワークでその解決策を考えさせるという、本学の教育の神髄である実学精神にあふれたものでした。社会科学を学ぶ学生が、自然科学系のゼミで成長する姿は学生自身の証言からも伺えます（「八木宏樹ゼミナール」緑丘116号2014年）。先生のゼミから理系の大学院に進学し研究者になる学生も現れました。

私にとって忘れられないのは、2011年3月11日の東日本大震災の後、先生

が、2012年から2年間、「環境科学」の講義の中で「震災と復興」をテーマとして取り上げられたことです。震災を学生に伝えなければと思い、先生にご相談したところ、即答で次年度から開講と決まり、先生の幅広い人脈により、支援に当たった現地の金融機関・ボランティア、地震・原子力災害・メンタルケア・行政等の専門家の方々を講師に迎えることができました。緊迫の2年間でしたが、多くの初年次学生や外国人留学生在が聴講し、ボランティアへの派遣も生まれました。

八木先生は退職後も客員研究員として本学で研究を続けておられます。飽くなき研究心は、先生を新たな研究テーマに駆り立てていることと思います。一層のご活躍を期待するとともに、私どもへの変わらぬご指導をお願いする次第であります。